

学校図書館と二つの「教育的配慮」： 利用指導と選書・蔵書の観点からの抑制

小出 晋之将（文学研究科比較文明学専攻）

はじめに

学校図書館は、図書館であるのか、という問いかけに対して、学校図書館の諸性質を鑑みた場合、私は明確な回答を持ちえない。

例えば、「図書館は、権力の介入または社会的圧力に左右されることなく、自らの責任にもとづき、図書館間の相互協力をふくむ図書館の総力をあげて、収集した資料と整備された施設を国民の利用に供するものである。」という図書館の自由に関する宣言の3条項目に記載されている基本的な理念が存在する。

しかし、学校図書館においては、これはそのままに適用されえないというのは周知のことだろう。例えば、学校図書館法第2条「…学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成することを目的として…」という条文があるが、「図書館の自由」は教育の目的という指向性により制限される、という理解も存在している。学校図書館は教育機関として、その自治体の首長や他の公共機関の影響を一定以上受けることを考慮しなくてはならない。良く言うのならば、学校図書館は教育と知の門戸という二つの領域を担いつつ双方を繋ぐ架け橋でもあるが、現実的に言うのならば私の前稿でも触れているが、この異なる二つの領域の間で揺らされ変動する社会的・制度的脆弱性を有している¹⁾。

この領域が重なる境界線を中立性、と評すれば聞こえはいい。しかし、その中立性は極めて現実的な折衷によるバランス感覚において成立するものであり、その対応はその時点での社会的状況・反応に依拠する部分が大きいのも確かだろう。これが、その根幹たる社会的評価が現実の群体における蓋然的判断、共同体を形成する国民・市民らにより築き上げられた歴史的総評に即したものであるのなら特段問題になるものでもない。だが、少なくとも『はだしのゲン』を巡る事案が学校図書館の専門職員の意見を反映させた検討過程を経たものであるのなら、その当該図書に対する精査がなされているはずなのに、「教育的配慮」という語にその理由のすべてを還元させてしまっている。その為、それ以前の他の有害と論ぜられた図書に対する対応の説得性も非常に希薄に見えることになってしまった。それでは、こうした教育的命題においてしばしば用いられる教育的配慮とはどのような解釈を有する語であり、近年ではどのような用いられ方をされてきたのか。

本論では、教育的配慮という語の学校図書館での基本的解釈に触れた後に、それが実際に用いられた事例を取り上げて考察、現在も継続して生じている図書館全体の一つの懸案事項「理由なき閉架」に関して論じたい。

1. 学校図書館における「教育的配慮」の基本的解釈

まず、「教育的配慮」という語を学校図書館の議論で取り扱う際の基本的解釈に関して言及しよう。教育的配慮という語が非常に多様な解釈の下にあるのは今更指摘すべきことではないが、学校図書館を巡る議論でこの語が出る場合、1) 児童生徒がアクセス可能な情報資源及び各媒体（紙・電子問わず）の取り扱いに関する利用指導や情報リテラシーの育成に関する教育的配慮、もしくは、2) 選書・蔵書など取り扱われる情報の選定をめぐる教育的配慮という二つの解釈において論じることが出来る。学校図書館におけるこうした二つの配慮を学校図書館法1条及び2条を含めた基本的姿勢と照合しつつ簡潔にまとめるならば、「悪

書から遠ざけつつ制限された自由において、児童生徒の視野を自己学習により拡張させる」といった表現になるだろうか。無論、学校図書館が学校に付帯する教育施設である以上、学校図書館法 2 条で指し示すような教育の目的に沿う形で機能するのは自然なことであり、1991 年に決議された学校図書館憲章にて触れられている理念及び機能にもそれは一致している点ではある²⁾。

それでは、1) 児童生徒の情報資源の取り扱い方への指導における教育的配慮を取り上げる。この教育的配慮は、児童生徒が資料探索を行う際、教職がその方向性を指示し、司書教諭もしくは学校司書が補助をどこまで行うのかという場面で発揮される。毛利和弘は慶応義塾大学三田情報センターの提唱する利用指導の形態と教育的機能の区分を例に挙げ、図書だけでなく施設自体も含めた全般的な利用法の指導を行うことで、情報獲得に関する教育効果が高まると述べている³⁾。この毛利の論を学校図書館に当てはめた場合、必ずしも大学図書館と同様の教育効果が見込めるというわけではないだろう。だが、確かに、学校図書館という情報センターの利用に際して、学年や教育の進捗状況を鑑みた場合、情報資源活用能力に差異が生じてくるのは否めない。児童生徒が必要とする情報資源に辿り着く為の補助を司書教諭もしくは学校司書、その他の教職員が担う際には、必要とされる資料群まで誘導を行うのか、具体的資料を提示するのか、その資料の使い方、見方まで指導を行うかなど、自発的学習という視点を踏まえつつ、児童生徒らの習熟状況に合わせた情報の選択範囲と道筋の提供の程度が問われることになる。こうした発達段階及び学年に合わせた情報の取り扱いは一応の体系化はなされているが、それが意識して実施されているかという点には疑問が残る⁴⁾。加えて、学校図書館という限定された空間ならではの役割として、近年では利用指導の範疇として情報リテラシーの育成を重視する論調が加速してはいる。ただ、情報機器を検索端末として活用するための指導の中で、技術的な面だけではなく倫理的な面においても情報リテラシーの育成を図ろうとする動きはあるが、教科単元との兼ね合いからとりわけ情報倫理の育成にまでは手が回らないように見受けられる。

次いで、2) 図書の選書や蔵書管理、取り扱われる情報資源の側面からの教育的配慮について取り上げる。この配慮は倫理的・道徳的な面や良書主義的選書観に立脚し、坂田仰が言うところのゲートキーパー機能が期待されている⁵⁾。この場合のゲートキーパーというのは、不適切な書架が児童生徒の目に入る前に選定段階でふるいにかけるという構想であり、全国学校図書館協議会における「図書選定基準」⁶⁾を参照しつつも、学校長並びに保護者による要求を反映した選書姿勢へとやりやすい。また、坂田のゲートキーパー機能を例に挙げ、肯定・補強するものとしての教育的配慮に関して整理・考察した大川るみの論文がこの論点を掘り下げる際には有意であるだろう⁷⁾。この教育的配慮は強制力を有する門番として機能していたために、大川も憂慮していた点ではあるが、その配慮に該当する事項だと判断された場合、一律的な閲覧制限措置ないし閉架措置へと繋がる可能性、事前検閲を行う検閲機構（フィルタリング）となりかねない可能性を有している。本論では二章において触れていくが、近年の事例を見る限り、その審議の論点、該当図書における「教育上の不適切さ」の性質こそ異なるが、そこには極めてパターンリズムの対応を見て取ることができる。

学校図書館における選定は他の館種の図書館よりもやや過保護なパターンリズムのフィルター、歴史性や時代性などよりもその瞬間の社会的価値観における語や表現の適切さを重視している。特に、発達段階にある児童生徒の倫理観への影響を中心に捉え機能する。そして、学校図書館の蔵書から健全な教養の育成に際して不適切と取れる図書が検出或いは外部からの指摘を受けた場合、往々にして当該図書に対して即時的閉架あるいは閲覧制限を課するのだ。しかも、一貫性や総合的な評価を行うための観点や措置が現状確保されておらず、極め

て閉鎖的かつ機械的な判断が下されかねない危険性も存在している。

以上の二つの解釈が大まかに見ると存在するが、現在の学校図書館及びそれを利用する児童生徒を対象とした教育的配慮という語は、この後者の意味、取り扱われる情報自体に関して、それもやや抑制的ともとれる面で目につくことが多い。その抑制は1)の「多様な情報に触れて処理する能力を涵養していくための教授的抑制」ではなく、2)の「触れてもいい情報を予め選定した教導的抑制」として表出しがちである。

その原因として、先にも触れたことではあるが、総合的な情報処理技術、特に単純な情報機器の取り扱い以外でのリテラシー教育が非常に煩雑であることも関係しているだろう。その指導する人材の育成や教本、児童生徒やその周辺環境に対する、それこそ教育的配慮に関して考えると、試験的な授業を導入している学校や単元に余裕がある学校でしか導入できないのではないだろうか。そうした状況から鑑みるにあたり、人的、単元的な面から、よりコストが少ない方、つまり触れる情報の制限を選択しているとするのかもしれない。

ともあれ、学校図書館の利用に関する論調としては、それがレファレンスを含んだ利用指導であれ、読書環境であれ、いずれの形においても児童生徒の学習意欲や自学的発展性が損なわれないよう「学習阻害」に総合的・教育的に配慮するものが多く見られた。とはいえ、実際には学校図書館の周囲を取り巻く環境の諸影響から「教育的配慮」は基本的には児童生徒の読書活動へのひそかなパターンリズムとして機能してきた、とすることもできるだろう。それが情報及びアクセス端末の取り扱い方の教授を中心に行うか、情報選択能力が涵養されていなくても問題ない情報資源を提供する様に収集・整理を行っていくのか、という違いはあっても、健全な教養の育成に寄与する形態をやや保守的ではあるが維持してきたのである。

ただ、学校図書館のこうしたやや抑制的、ある種合理的ともいえる「教育的配慮」は特に倫理・道徳的観点では、教育の現場以外にも地方の首長が掲げる教育的施策や市民の要請など世俗性を加味することがままある。そして、この世俗性から生じる社会的、教育的要求はあたかもそれが総意であるかのように捉えられ機械的な処理がなされてきた。しかし、近年ではそうした閉架要求のみを重視し今までの閉架対応と同様の機械的振る舞いをするのが権利意識や教育観など市民感情を刺激することにも繋がってきている。次章では、教育的配慮に基づいた各学校図書館及び各公共図書館の閉架対応とそれに関する各団体の反応に関して通覧していく。

2. 「教育的配慮」による閉架・閲覧制限適用事例と諸対応

まず、この章以降で例に挙げられる有害図書並びに閉架請求対象図書の取り扱いに関して、予め述べておかねばならないことがある。それは、閉架要求や有害図書指定に関する統合的（国家的）な規定は存在していない、という点である。だが、強制力の有無や優越、どこまでの配慮が必要なのかなど、議論こそ必要ではあるが、原則的に有害図書に対する公共図書館の判断は全国の地方公共団体それぞれの青少年保護育成条例における指定範囲による漠然とした影響は考慮しておく必要がある。そして、定型적인言い回しになるが、こうした青少年保護育成条例は、（日本では必ずしも一般的とは言えないが）「知る自由」の社会的保障を體現しようとする学校図書館及び公共図書館に対しては、尊重しつつも図書の取り扱いに対する配慮を促すような形がしばしば選択される。そして、学校図書館においては地方議会以外にも地方の長や教育委員会、市民からの要請が、前章で述べたような「教育的配慮」という形をとり一定以上の圧力をもってのしかかってくるのである。

2.1『ハリーポッター』の不適切表現をめぐる教育的配慮

例えば、2000 年『ハリーポッターと秘密の部屋』の文中に先天性疾患に関する差別的表現があるという市民団体の訴えに対して、JLA 図書館の自由に関する調査委員会は同年 11 月 16 日に「差別的表現と批判された蔵書の提供について」という声明を発表した⁸⁾。JLA はこの声明で図書館は資料保存及び継承という役を担うものであり、あくまで思想の評価・判定を行う機関ではなく、「知る権利」を担保するものとして歴史の保存性を含めた上で陳情者と執筆者、市民間で合意を形成することの重要性を説いた。文中の表現を正確に翻訳したために起きたこの問題は、翻訳者と作者の代理人そして市民団体の協議の末、66 刷以降は該当箇所が変更されることが着地点となった。

この問題を受け、実際の対応の一部の例として、朝日新聞は 2001 年 2 月 8 日の夕刊にて三つの図書館と三県の教育委員会の対応に関して触れている⁹⁾。

ここでは概略的に述べるが、図書館側の対応として、当時の浦和市立図書館（現・市立北浦和図書館）は児童書コーナーから一般図書へ移行し、問題点を指摘した文書を添付、横浜市中心図書館は正式な対応が決まるまで貸し出しを止めた。大阪市立図書館は該当部分が削除済みの 66 刷以降の版が入るまで貸し出しの停止を決定している。

また、教育委員会の対応としては、神奈川県及び鹿児島県は県立学校や小中学校に指導の徹底と事実上の閉架要請、奈良県教委は 2 月時点では買い替えか該当箇所を隠すかとの判断保留状態にあった。いずれも、差別的表現による悪影響に対しての「教育的配慮」に立脚したものではあるが、この例として挙げられた地方自治体からの公共図書館への要請と教育委員会の学校図書館への要請は、必ずしも同一の目的意識を持って行われたものではない。しかし、前年に JLA による声明がなされたにも関わらず、該当箇所の修正前後で比較可能な状態にした図書館より閉架にした図書館が多かったことに関しては遺憾の意を禁じ得ない。この事案は当該図書が部分的「社会的評価」や「差別性」を含む場合には、「社会的配慮」及び「教育的配慮」へと還元され、よりコストがかからず保護的な選択、一律的な有害図書及び閉架指定を選択する可能性があるという例ではある。

2.2『はだしのゲン』閉架問題の現在

そして、この同種の検討及び判断の構造は、その論点こそ異なるが、2013 年の『はだしのゲン』閉架問題にも表出した。私の前稿で論じたものであるため、ここでは必要以上のものは述べないが、『ハリーポッター』内の差別的表現に関する事態が一律的閉架や差し替えに早急に移行できたのに対し、『はだしのゲン』内の特定の残虐表現をめぐるこの問題は松江市教育委員会からの市内の小中学校への閉架要請に他の地方自治体や教育委員会が追随する形で表出した。その一例としては、鳥取市中央図書館が自主的閉架へ、泉佐野市市長・教育委員会が市内の小中学校への回収・閉架を要請した。どの事案においても同年 8 月の報道に前後するような形で、市民たちからの反応を受け、受動的対応として「知る権利」への配慮ということを理由に閉架要請を撤回している。

しかし、この松江市の事案以降にも他の都道府県の教育委員会に対して市民からの『はだしのゲン』閉架要請があり、13 自治体及び 8 つの議会にてその取り扱いに関する議論が今も行われているということは周知されている¹⁰⁾。本稿では要請があった自治体及び議会の中から都内の二つの議会を取り上げ審議の諸例とするが、別稿にてこれらの審議の統括的・総合的精査を行う予定である。

まず、中野区議会では平成 25 年 9 月 19 日決算特別委員会にて触れられ、今回の『はだしのゲン』のように、一つの書籍の解釈やその取り扱いが社会的に話題になった際には区と

して一定の姿勢を持つための教育委員会の今後の議論の発展を期待する、という見解を提出している¹¹⁾。

そして、足立区では2013（平成25）年第三回定例会及び9月29日の文教委員会から、2014（平成26）年9月文教委員会及び10月24日から25日にかけての第三回定例会まで審議は継続している¹²⁾。2015年1月調べにおける、足立区の審議状況としては2014（平成26）年8月21日文教委員会のものになる。足立区議会では松江市の閉架撤回初期の閲覧制限にあった状態を例に挙げつつ、足立区内の学校においても当該図書の学年に応じた段階的な閲覧制限の解除が継続している点などを指摘し、特殊な状況にあることを問題視した。そして松江市が現在では通常閲覧可能な状況にあること踏まえ、足立区として現在の特殊状況を変えていくのか今後の対応を決めるための議論の必要性を述べ、審議継続を決定している¹³⁾。この二議会では『はだしのゲン』に関しては社会的反発を考慮しながらも、自治体としての独自の見解も並行して構築しないわけにはいかない、というある種の義務感にも似た姿勢を見て取ることができる。

2.3 「教育的配慮」の論点の違い

さて、その対応の形式こそ同じではあるが、この二冊を巡る情報資源を取り扱う際の「教育的配慮」は論点が異なることは留意しておきたい。各教育委員会の「教育的配慮」による有害図書指定は、類似した指定基準を有しており、残虐・暴力表現、性的描写、歴史誤認、差別表現、生命道徳的配慮を必要とする、などの事柄において精査される。だが、こうした問題が問われる際には、本章で例に挙げたような具体的事項による閲覧制限以外にも、年齢経過に伴う精神の成熟及び発達段階に応じて受容・処理可能な問題も存在し、知識や道徳観念などに応じて、もしも児童生徒が選択を希望するならば閲覧を認める様な措置もある。例えば『はだしのゲン』をめぐる松江市や足立区の学年に応じた開示などの対応がそれに該当するだろう。これに関しては、閲覧の際に児童生徒への同意の取り付けを行うことや、事前指導による読書姿勢の形成で補完できる部分も大きい。しかし、『ハリーポッター』の差別的表現をめぐる問題は、読書姿勢の形成に付随する受容能力の拡張を超えて、それを読み認知することにより価値や語彙の拡張、偏見の助長を生む可能性が存在する。これは情報処理能力及び図書に付加された感情的影響を受容する精神の発達とはまた異なるものであり、それを歴史的背景・経緯を知ることなくただの知識として学習することにより生じる問題である。また、「教育的配慮」はそうした情報を得る主体である児童生徒の情操及び知識に関して「どのような阻害があるのか」を配慮しているのか否かは覚えておくべき事柄ではある。

3. 学校図書館で行われる「理由なき閉架」

『はだしのゲン』『ハリーポッター』共に、その問題点として挙げられた個所の性質や論点こそ異なるが、異議申し立てが顕在化された場合、保守的な価値と繋がり形成された「教育的配慮」により、あたかも個別事例であるかのように取り上げつつも、表面上は一律的な閉架措置へと処されてきた。加えて着目しておきたいのが、これらの問題が公的議論の場で取り扱われる際に、公立図書館には市議会が、学校図書館には教育委員会に代表される教育行政がそれぞれの立場からの見解を提出することを求められており、当該図書館の手を離れたところに決定権や判断の主体がある様に見えることである。こうした場面で行使される「教育的配慮」は学校のみならず地域という範囲からも社会的・教育的な影響を受けやすい性質を有した包括的概念ではあるが、しばしば図書館における知の自由を軽視したパターンリズム的選書と化しているように見受けられる。そして残念なことに、専門的な見地を有

する識者が存在していれば、当該書籍取り扱いをめぐる議論の場で論ぜられるはずの社会的評価、つまりは歴史的・社会的文脈においてその図書に付与され積み重ねられていたはずの評価は存外に考慮されていないのも事実なのだ。

例に挙げた二つの事案では、学校図書館における自己選書・蔵書管理能力の不足及び「教育的配慮」における機械的閉架処理が問われた。だが、それを学校図書館という教育と知の二重の論理が存在する空間における図書館の自由に関する宣言の教育的配慮による抑制の問題、とだけ容易に結論付けるわけにはいかない。

というのも、「図書館の自由に関する宣言」は、JLA では基本的には全館種に妥当するものとして1954年に採択1979年に改定されており、アメリカにおける同種の「library Bill of Rights」を参考にしている。しかし、全国SLAにおいてはその限りではなく、学校図書館憲章などが独自に採択されている。その根幹をなしているのが児童生徒の読書活動の推進及び健全な教養の育成に資するということであり、やや教育的良書主義とも取れる資料選定を、学校図書館を取り巻く諸論調に垣間見ることもできるだろう。

加えて、良書や有害図書に関する諸判断は大まかな指針や過去の事例こそあるが、その多くは詳細なガイドラインなしに下された。特に教育委員会などにおける閉架要求は市民の申し立てへの教育的経験知による判断である可能性が高い。その良書悪書の判断は、児童生徒の健全な教養の育成に寄与するための機微に長けた実践知ないし経験知によりくだされる。それは必ずしも作中表現を分析した一律的な判断ではなくより変動的に感性的に行われるものである。

ただ、学校と図書館という二つの領域の狭間に存在する教育施設である学校図書館では、いくつかの教育的目的による制限こそ存在するが、知的探究に対して持続的かつ発展的役割を担う最後の砦としての側面も少なからず存在しているのを忘れてはならない。そして、そうした最後の砦において児童生徒は知の体系だけではなくそれを持続的・発展的に運用する為の自己学習の観点を形成していくことになる。そうした社会的役割を持つ場が、外部へと向けた論理性を放棄した客観的視点からの検証が困難である閉架状態、言うなれば極めて機械的な事前検閲（フィルタリング）の実施による「理由なき閉架」の様な状態にあるのは考えなくてはいけない。こと現代においては説明責任なしに門番としての機能を行行使うことは簡単には許されないのではないか、特にそれが自由権に関わるものであるのならば尚更である。それが、児童生徒を対象にしているからとはいえ、児童生徒やその保護者を切り離して議論を進めるのは最早現代にはそぐわない事態になってきている。無論、専門家は専門家の視点があるだろうが、教育や行政の専門家がいないのに、どうして学校図書館の専門家は教育的機能を発揮しないのか。「理由なき閉架」というのは読む対象である児童生徒が開かれているはずの知識から隔離されているというだけでなく、理由を示すはずの学校図書館関係者がこうした議論の場から切り離された状況も指しているのだ。

4. おわりに

本論の結びにあたり、明確には触れられなかった論点を一つだけ、取り上げておきたい。

それは、「教育的配慮」の対象、「誰に向けたものなのか」に関する問題点である。本論一章において教育的配慮の基本的な二つの性質に関して触れ、第二章及び三章では事前検閲を行う検閲機構（フィルタリング）が議論を省略させ、「理由なき閉架」ともいえるような事態を生んでいる状況を提示した。このいずれも運用する側においては未だに体系化されきっておらず経験知に依る部分が大きい。こうした現状には、教育的配慮という語の著しいマジックワード化が議論と思考の停滞を生んでいるような印象すら受ける。体系化や既存の論の整

理を通じて、この語の対象が児童生徒なのかそれとも教育全体なのか、運用する学校なのか、など、複合的なものを意識してはいるのだろうが、その向く先に関してはそれが発せられた場の違いも含めて慎重に見ていかななくてはならない。

学校図書館は前川恒雄が主張していたような自己教育機関¹⁴⁾としての性質を国内において現在も明確に目的として保持している館種であると私は考える。とはいえ、学校に付帯する教育施設である以上、当たり前のことではあるのだが、そうした自己教育機関における教育的配慮に基づく図書の選定は必然であり、児童生徒の多面的成長を考慮した包括的な概念としての「教育的配慮」という語の運用は確かに有意であるだろう。だが、学校図書館が知の門扉であろうとし、自己の可能性の発見・拡大を目的とするのならば、それが機械的な処理のみがなされる場であってはいけない。児童生徒が広義な意味での情報探索活動を行い、やがてなるであろう市民への萌芽を涵養していくための場としても意識しなくてはならないのではないか。学校図書館は、教育と図書館という二つの境界の狭間に存在する場所ではあるが、児童生徒が社会の一端に触れる二次的な経験の場でもある。そこでは、児童生徒は単に情報資源や娯楽としてだけではなく本来的に教育的な社会の断片を読み取るのだ。児童生徒らの知的探求心、それこそ自発的学習性に起因する疑問は情報資源とそれを取り扱う者や場所にも向けられているのを忘れてはならない。学校図書館が、そこに置かれた情報資源の取り扱いに関して不誠実な姿勢を取ることは、社会の不誠実さ、理不尽な社会性を示していることにもなる。無論、コストの問題はあるのだろうが、やがて社会の構成員となるその萌芽に対してもかかる手間を惜しんではならないのではないだろうか。

¹⁾ 小出晋之将「学校図書館における漫画の取り扱いの再検討」『St. Paul's Librarian』No.28, 2013, p.28-35.

²⁾ 佐野友彦「『学校図書館憲章』の制定にあたって」『学校図書館』No.493, 1991, p.47-50.
黒沢浩「『学校図書館憲章』の制定経過」No.493, 1991, p.51-52.

³⁾ 毛利和弘「レファレンス実施における教育効果と教育的配慮の考察：利用指導を主として」『私立大学図書館協会会報』No.72, 1979.7, p.98-107.

⁴⁾ アメリカでの発達段階に応じた情報の取り扱いの変化に関する研究であり、日本でも参考にされている。

M.B.Eisenberg, *Information Problem Solving: The Big Six Skills Approach to Library and Information Skills Instruction*, Ablex. Publishing Corp, Norwood: NJ, 1990, p.44-45.

⁵⁾ 坂田仰「学校図書館法」『季刊教育法』No.112, 1997, p.21-26.

⁶⁾ 全国学校図書館協議会「全国学校図書館協議会図書選定基準」2008.
<http://www.j-sla.or.jp/material/kijun/post-34.html>, (参照 2015-3-30).

⁷⁾ 大川るみ「学校図書館と「図書館の自由」—「教育的配慮」を中心に—」『日本女子大学紀要 家政学部』Vol.51, 2004, p.149-156. 引用は p.152.

⁸⁾ 「差別的表現と批判された蔵書の提供について (コメント)」2000.
<http://www.jla.or.jp/portals/0/html/jiyu/sabetsu.html>, (参照 2015-3-30).

⁹⁾ 「『ハリー』に差別的表現」『朝日新聞 (夕刊)』2001.2.8, 14 面.

¹⁰⁾ The Huffington Post「『はだしのゲン』東京など 13 自治体に撤去要請」2014.
http://www.huffingtonpost.jp/2014/04/21/hadashi-no-gen_n_5188255.html, (参照 2015-3-30).

要請があった自治体は、北海道、札幌市、仙台市、東京都、千代田区、新宿区、港区、大田区、豊島区、練馬区、文京区、大阪市、鳥取市の 13 の自治体。このほか、撤去を求める意見書が寄せ

られたのは、仙台市議会、中野区議会、足立区議会、神奈川県議会、松江市議会、高知市議会、鹿児島県議会である。

¹¹⁾ 中野区議会「平成 25 年 9 月 19 日決算特別委員会」

http://kugikai-nakano.jp/view.html?gijiroku_id=566&s=%E3%81%AF%E3%81%A0%E3%81%97%E3%81%AE%E3%82%B2%E3%83%B3&#S1, (参照 2015-3-30)。

○篠委員 「はだしのゲン」についてなんですが、これも各新聞の社説の取り上げるところとなったわけですが、下村文科大臣のコメントは至って温厚なもので、どこかでとめちゃうとかというものじゃなく、それぞれしっかりとした姿勢で判断して、年齢に即した行動がとれているかというようなところもしっかり目を届かせてくれというコメントを出されていますね。まさにそのとおりだと思うんですが、内容については、読売新聞もかなり穏健な発言の中にも、3,000 万人殺したとかという、やはり事実の裏付けがないことが野放しになっちゃうということは、表現としてはわかる。こういう激しいものである。実数を言っているんじゃないでね。ですけど、やはり我々が考えても、世界的にそれが、これは 600 万冊以上売れた本ですから、英語版にもなっていると聞きしていますし、世界中に回れば——事実ではないとかということじゃないものがひとり歩きするおそれもあるし、またそうじゃなく、描写の激し過ぎる部分については小学校ではいかなものかなというような部分もあるかもしれない。そういったことについて、中野区の教育委員会で議論に上がったことがあるかだけお聞きします。

○川島教育委員会事務局指導室長 この本が全国的に関心と呼んでいるということは承知していますが、本区の教育委員会において、特定の書籍に関して何らかの議論があったということはこれまでもないというふうに考えております。

○篠委員 教育委員会は、例えば一つの陳情が出ると、それを誠実に対応しなきゃいけないという場所でもあるんですが、また、それに負けじと陳情合戦になる場所にも事実なっているわけですね。法律に則っていますから、教育委員会、何しているんだという切り込みはなかなか難しいんですが、やはり、こういうときには中野区としても姿勢を問われたときには答えられるように、中野区は何にも考えていなくて、放ってありますという答えしか出てこないようでは、いかなものかなとも思えますので、個別については云々というところもわかりますけど、今後の対応を期待したいと思います。

¹²⁾ 足立区議会『会議録検索システム』

<http://gijiroku.gikai-adachi.jp/voices/index.asp>, (参照 2015-3-30)。

¹³⁾ 足立区議会「平成 26 年 8 月 21 日文教委員会」『会議録検索システム』

http://gijiroku.gikai-adachi.jp/voices/CGI/voiweb.exe?ACT=200&KENSAKU=1&SORT=0&KTYP=1,2,3&KGTP=1,2,3&TITL_SUBT=%95BD%90AC%82Q%82U%94N%81@%82W%8C%8E%82Q%82P%93FA%95B6%8B%B3%88CF%88F5%89EF%81%7C08%8C%8E21%93FA-01%8D%86&SFIELD1=HTGN&SKEY1=%82CD%82BE%82%B5%82CC%83Q%83%93&SSPLIT1=+++2F%21%28%29-&KGNO=379&FINO=700&HUID=65718&UNID=K_H260821150160, (参照 2015-3-30)。

◆新井英生 委員 ちょっと伺いますが、この 8 月に入ってコンビニや本屋さんに行くと、結構置いてあるのですよ。ある意味 8 月だという、特殊というか、その季節の事情があるのかもしれないのですけれども、聞きたいのは、学校の図書館に置いてある学校がありますね。発達段階に添って閲覧させるというふうな指導しているわけですが、その本が汚くなる、曝書というのですか、見られなくなる、古くなる状態、見られないようになると新しいのを買ったりしてやるわけでしょう。そういうのは「はだしのゲン」とかを新しくまた買換えようとかという、そういう状態になる可能性についてはどうなのでしょうかね。

◎教育指導室長 図書購入に関しては、校長の責任の下、予算上で購入をしていますので、学校の中で、例えばこういう本を買っていきいたいというのは計画を立てていますので、その中に「は

だしのゲン」が含まれていれば、また新しく購入をされるということになると思います。

◆新井英生 委員 校長の判断に任せるということですね。そういう意味なのね。

◎教育指導室長 予算の下、校長の責任の下、学校の中で決めて購入をしているところでございます。

◆新井英生 委員 今、こうやって陳情出たり、各自治体でもいろいろな議論されている状態の中で、それで足立区ではそうやって高学年のみとか、発達段階においてとわざわざそういう通達をしているわけじゃないですか。その中においても、まだ校長のみに新規購入を任せるのかと。特殊事情ですよ、これは。「はだしのゲン」については。その辺を普通の他の本と同じような扱いで校長に任せるのかということ。

◎教育指導室長 繰り返しになりますけれども、戦争に関する内容の本等は、学校のほうで校長の責任の下、相談をしながら決めているというところでございます。

◎学校教育部長 若干補足でございますけれども、当然議会等で、あるいは国の中でも、こういったこの本に対するご意見を頂戴しておりまして、学校長会の中でもこの件についてはこういったご意見があるということで、発達段階に応じてそれぞれ書架の位置についても考慮しろというようなことをお話しているわけでございますので、新たに曝書ということで古くなった場合の購入だというふうに思いますけれども、そういったことについてはまた校長会等を通じて、改めて相談等を行いながらやっていきたいというふうに考えております。

◆さとう純子 委員 まず、これは松江市教育委員会が、閲覧を自由にできなくするというふうに言いましたら、議会のほうではそれはだめよというふうになって撤回された事案だと思うのです。それで、情報によりますと、この松江市では、今は何と規制かけるとか、高学年じゃなきゃだめだよということじゃなくて、自由に閲覧ができるように変わったというふうに聞いているんですけれども、ご存じでしょうか。

◎教育指導室長 その内容については理解をしております。

◆さとう純子 委員 そうなんですね。ですから、この陳情者の方は、松江市の教育委員会のことを持ちあげて言っておりますけれども、その松江市自体がもう既に誰でも自由に閲覧ができる、学校図書館に配置したということでもあります。

それと先日、足立区のアトリウムで開かれた原爆・平和・戦争を考える展示会、これは主催が足立区原爆被害者の会で、後援が足立区教育委員会ですよ、ここにこういうふうに乗っているんです。ビデオ上映作品を充実させましたということで、「はだしのゲン」「つるにのって」ということを、今度は多数そういうことでビデオ上映いたしますよという案内なのですが、このことについてはもちろん教育委員会ご存じだと思うのですけれども、いかがでしょうか。

◎教育指導室長 その点についても理解をしております。

◆さとう純子 委員 ここに私も見学というか、見せていただいたのですけれども、やはり本当にこの原爆とか平和、戦争を考えるというので、皆さん高齢化していて、今展示しているものを持っている方がおっしゃられたのですけれども、こういうことを継続して皆さんに伝えたいけれども、今それを継続してできる自信がないというふうに高齢の実行委員会の方がおっしゃっていたのと、あと、その真実を語る語り部さんもどんどん亡くなっているということで、その辺についてもやはり「はだしのゲン」などを図書館にこっちは置かないでということなのですが、そういう意味での戦争に関する図書など、継続して、またこの足立区教育委員会が後援しているこの原爆・平和・戦争を考える展示会というものを維持発展させていく必要があると思うのですけれども、その辺ではいかがでしょうか。

◎学校教育部長 今、さとう委員お話になりましたそちらの後援でございますけれども、それについてはさとう委員お話のとおり、今後も継続していくということでございますけれども、今回この陳情につきましては学校図書館において、というところでございます。これは再三ご答弁申し上げているところですが、学校図書館においては発達段階に応じて、残虐なシーン

等もございますので、そういった形で実施していくというところでございます。

¹⁴⁾ 前川恒雄『われらの図書館』筑摩書房, 1987, 246p.